選考委員特別賞
リリー・フランキー賞

# 思春期についての考察
## ―親愛なる君へ―

北九州市立板櫃中学校　二年
小海　航

年齢、十一歳。性別、女。と言うより、女子。身長は自己申告で１４５㎝、体重は……書かないであげよう。自分では「友達より少しポッチャリ」と思っているようだ。このところ視力がずいぶん落ちたそうで、日中は、ほとんど眼鏡をかけている。二本の眼鏡を所持し、その日の服装や行事などによって使い分ける。僕が小学生の頃の同級生には、そんな人はいなかったと思うけど。いや、気付かなかっただけかもしれない。

最近、少し様子が変わってきた、僕の妹。不機嫌な日が多く、ちょっとしたことでピリピリする。世の中への不平不満が増え、独りになりたいとつぶやき、そうかと思えば、やたら甘えてくるときもある。

この態度。この言動。僕には覚えがある。間違いない。これは「思春期」だ。

ああ、懐かしい。その反抗的な表情と、得体の知れないイライラ感いっぱいの雰囲気は、まさに僕が経験した「思春期」への突入のサインなのだ。

思春期とは、第二次性徴の発現の始まりから終わりまでを指し、子供から大人へ変貌する心身の発達がある時期をいう。

これについて、もちろん妹もちゃんと学校の授業で習い、教科書をしっかり読んだはずなので、今さら細かくは説明しない。が、経験者として一言。

「あきらめろ。そして、切り替えろ。」

とにかく何事にも腹が立つのだ。家族や先生の何気ない言葉、政治・経済にまでつっかかりたくなる。自分を見つめ、客観視する視点が生まれることで、理想と現実に大きなギャップを感じる。そのため、他者に対しても意

識が過剰になり、共感できる点がなかった場合、直ちに拒絶反応が起こる。思春期最大の特徴であると言えるだろう。

この状態で、不用意に妹を刺激するのは非常に危険な行為なので、細心の注意をはらいつつ、しばらく観察してみる。下手に近づいて火傷するのはごめんだ。

小さい頃に両親をまねて覚えてしまってからは、未だに僕を名前呼びする妹。大声で呼びつけられて何事かと思えば、

「ここ。教えて。」

「は？」

「だーかーら!算数教えて!」

机上の問題集を指さし、椅子にふんぞりかえっている。ここで（三学年上の兄に向かって、それがお願いをする態度ですかね）なんて、絶対に口にしてはいけない。ぐっと我慢しつつ、懇切丁寧に解説する。それなのに、少しも理解できなかった自分のことは棚に上げ、妹はこう言った。

「今さ、バカって思ったやろ。」

言葉では言い表せないほどの脱力感が僕を襲う。しかし、これは、自分の理想の姿と現実の能力との差に苦しんでいる妹の心の叫びなのだ。兄として、しっかりと受け止めてやらねば。

現在、家庭内での攻撃対象は、主に僕と父である。これは、相手によって露骨に態度を変える、思春期女子特有のものだ。母親とは仲良くやっているようなので、異性に対して嫌悪感を持ち始めたのかもしれない。

そういえば、父が先日、こんなことを話していた。

「普段は誘っても断られるけど、今日は、めずらしく一緒にドライブしてきたよ。出先で散歩中に、手をつなごうとしてきたから嬉しくて。でも、自分で気がついたみたいで、すごい勢いで離された。悲しかったなあ。間違えたって言われたんよ。」

たしかに、父にとってはショックな出来事だっただろうが、その程度なら日常茶飯事である。自分が傷つきたくなければ、この時期、むやみに妹の身体に触れないこと

だ。

家族としての愛情表現で、そのふっくらとしたほっぺたを撫でようとすると睨まれ、流行の頭ポンをした手は無情に払い落とされる。この点について、父は少し認識が甘い。いつまでも子ども扱いしていてはいけない。とは言うものの、全然構わないでいると寂しがる。思春期女子は、一筋縄ではいかない複雑な生き物なのだ。

子どもから大人への過渡期。人生の全責任を負って生きていかなければならない大人へと自立していく過程において、何の変化もないなど有り得ないだろう。

実際、僕自身だって「なぜ生まれてきたのか」と思い悩み、母親に問答しては困らせたこともあるし、どんな壮大な構想でもやればできる気がして、無理に背伸びばかりしていたように思う。けれど、そのうちだんだんと物事に対して折り合いをつけていくことを習得し、肩の力をうまく抜けるようになってきた。まあ、ほんの少しずつではあるが。

以前は何をしても可愛かった妹の、全く可愛げがなくなった姿を見兼ねて、僕はメッセージを送ることにした。

妹よ。悩み多き毎日を過ごしている君は、今「思春期」の入り口にさしかかったのだ。自立と依存の葛藤の時期であるがゆえ、感情が不安定になるのは仕方がないことだ。大好きなチョコレートを食べるとき「脳に栄養を与えている」という理由をいちいちつけなくても大丈夫。君は太ってなどいない。体つきが女性らしく成長しているだけだ。些細なことで傷ついたり悩んだり、そんな君を一番近くで見守っている。僕は君より少し先を歩いてきたから、不安なときは僕に尋ねてみればいい。これでも、けっこう頼りになる男だ。

感動した妹からの「ありがとう！」を、少しでも期待した自分が愚かだった。

「自意識過剰の中二病の言いそうなことやね。自分こそ思春期の真っ只中やん。なんか、その満足げな顔が余計

イライラするわ。」
冷ややかな返事に、僕は心底がっかりしながらも、失敗に終わった原因に気付き反省した。他人からの助言や忠告は、思春期において嫌われることランキングの上位ではないか。経験したはずなのに、うっかりしていた。
それにしても、優しい兄からのお言葉を一蹴するとは。日頃の名前呼びの習慣のせいで、兄を尊敬するという気持ちが欠片も育っていない現実を目の当たりにして、僕は今さらながら激しく後悔している。
思い上がった妹を正しく導くのも、年長者である僕の務めだ。「中二病」などという俗語は、我が家では即刻使用禁止。さらに、今後は僕のことを「お兄ちゃん」と呼ぶように徹底するべきである。常々、両親が注意してきたのに、僕が妹を甘やかし許してきた結果がこれだ。
今一度、お互いの立場をきちんと確認し、聞く耳を持たせることが大切である。成長ホルモンの影響もあって、感情的になりがちだが、この時期に自分を律する方法を学んでおくことを怠ってはいけない。
妹が言うように、たしかに僕も「思春期の真っ只中」なのだろう。けれど、それを自覚し、ある程度コントロールできるようになった現時点で、僕は思春期のエキスパートだと自負している。時を同じくして、迷い悩み苦しんでいるからこそ、その痛みを分かってあげられるのだと思う。
友達以上親未満。この絶妙な距離感のありがたさを、思春期初心者である妹が一日も早く理解することを願ってやまない。
これから大人になるために必要で、とても重要な時期を、僕たち兄妹は共に過ごしている。それぞれの環境でもがきながら。そしていつか、一緒に笑い合う日が来るまで。「思春期という名の嵐を衝いて駆け抜けろ！」
僕らは、今、青春を謳歌する。